

山科本願寺跡(2)

発掘調査現地説明会資料



土塁と暗渠（北西から）

1997年9月6日

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

山科本願寺跡（2）発掘調査現地説明会資料

所在地 京都市山科区西野左義長町23
調査期間 1997年7月16日～継続中
調査面積 約300㎡
調査主体 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

1 はじめに

山科本願寺跡は山科盆地の中央部、山科川西岸に位置する。山科本願寺は文明10年（1478）本願寺八世蓮如上人^{れんにしやうにん}によって造営を開始し、文明15年（1483）に、その主要な施設を完成させている。寺域は、「御本寺」「内寺内」「外寺内」の三つの郭から構成され、その規模は南北1km、東西0.8kmおよそ30haにおよぶと推定されている。本願寺は寺内町の経済的發展に支えられて、おおいに繁栄したが、造営52年後の天文元年（1532）8月に細川晴元率いる法華宗徒・延暦寺宗徒・近江守護六角氏の連合軍^{どるい}によって総攻撃され、主要な建物は焼失した。寺域内には土を高く積み上げた土塁や堀をめぐらす防御施設を備えていたが、現在でもその一部がわずかながら残っている。

今回の調査地点は、山科本願寺を囲っていた一番内側の土塁と堀の南西隅に位置し、現在でも土塁の高まりが残っている部分である。調査対象は、この土塁部分とそのすぐ内側の平坦部で、ここに調査区を設定して発掘調査を実施した。土塁については表土層を除去して、一部断ち割り調査を行い土層の堆積状況を観察した。なお、本年度4～7月には今回の調査地点（調査地2）のすぐ東隣で発掘調査（調査地1）を実施しており、堀跡や1532年の焼き討ちの際に焼け落ちた埋甕^{うめがめ}を伴う建物跡などを検出している。

2 調査の概要

調査区で検出した遺構

調査区内では、山科本願寺に関係する遺構を多数検出した。調査地点は本願

寺廃絶以降、藪地であったため後世の攪乱もなく、大変良好な状態で遺構を検出することができた。

調査区の東半部で、建物を検出した。建物の規模は南北3.7m、東西2.7mで柱を支えた礎石が整然と並んでいる。この建物は炉跡^{ろあと}を伴っていた。炉跡は南北3.0m、東西1.5mの範囲が赤く焼け鉄や銅でできた釘が多数出土していることから、もしかすると鍛冶^{かじ}を行っていたかもしれない。またこの炉跡の南東部では、常滑焼き^{とこなめ}の大甕を埋めた跡（埋甕）を2カ所で検出した。鍛冶を行う際に必要であった水をここに蓄えていたのであろうか。この建物や埋甕跡は、焼土で埋もれた状態で検出したことから、天文元年（1532）の焼き討ちの際に焼け落ちたと考えられる。

調査区南西部、土塁のすぐ脇では石組みの井戸を1基検出した。東半部には、建物跡や多数の柱跡を検出しているのに対して、西半部には井戸を除いてめだった遺構がないことから、作業場として利用していた空地であったと考えられる。

また、調査区内では排水のための溝や土塁の下部に作られた暗渠^{あんきょ}も検出した。南側土塁に沿った東西溝は、調査区内から、西へと配水するためのものである。一方調査区北方から延長し、鉤型^{かぎがた}に曲がって西側土塁に直交する溝は、さらに土塁の下の暗渠につながり外堀へと排水していたようである。暗渠は径20～50cmの石を並べて作られており、現在も空洞となって土塁の下に残っている。暗渠部分の土の堆積状況から、この暗渠は土塁の土が盛られる時に同時に作られており、最初から計画的にここに排水施設を設けたものだとわかった。

土塁の調査

土塁は表土層を取り除いたところ、ほぼ造営当初の形状を検出することができた。土塁のすぐ内側、調査区内で排水溝や井戸を検出していることから考えても、約500年にわたってほとんどその形を変えることなく現在にいたっていることがわかる。土塁の規模は高さ5～6m、基底部の幅約12m、上面の幅約2～5mでコーナー部分にやや広い平坦面を持つ。上面は平坦だが両斜面はかなりの傾斜を持っていて、人力で容易に登れるものではない。さらに土塁の南

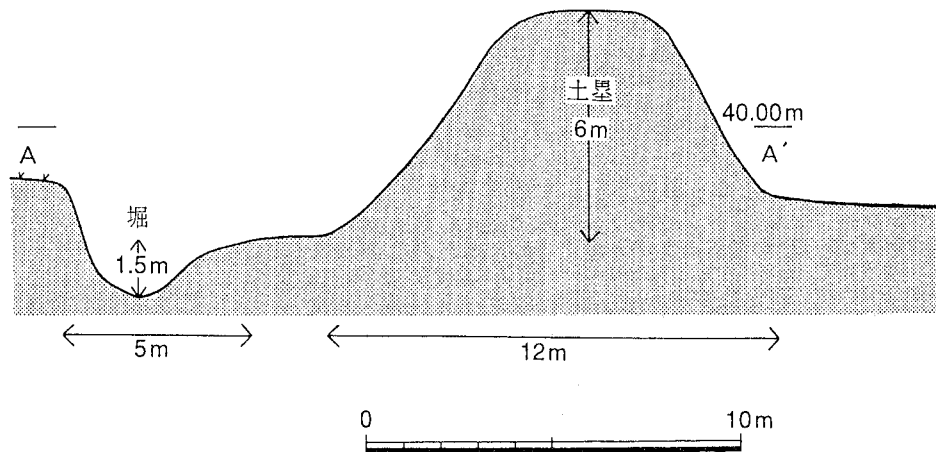


図1 土塁と堀の模式図

にあった堀とあわせて、防御施設としての機能は十分であったろう。

また南側土塁の断面を観察すると、土塁の土は基底部の高まりを作った後、北側から順番に斜面を作りながら積んでいった様子が良くわかる。

出土遺物

建物跡を埋めていた焼土層から、土器・瓦類が比較的まとまって出土したが、いずれも火災で焼けた痕跡があるものが多い。また炉跡に関係する鉄あるいは銅製の釘や焼けた壁土も多数出土した。埋甕は抜き取られており、破片は甕を据えた跡の穴の他、井戸からその大部分が出土した。井戸からも焼土や焼けた瓦類が出土した。焼土の埋まった状況や埋甕、井戸跡の遺物の出土状況から、火災の後片づけを行っていることがわかる。

なお、個々の遺物の詳細については未整理のため報告できないが、それぞれの遺構から出土した遺物の年代は、15世紀末～16世紀初頭でほぼ山科本願寺の時期のものである。

3 まとめ

調査の結果、土塁の規模や形状、寺域の一角の利用状況が明らかになった。現存する山科本願寺の土塁の発掘調査は今回が初めてで規模・形状を確認するとともに、築造方法がわかったことや土塁にともなう暗渠を検出したことは、大きな成果である。特に土塁と同時につくられた暗渠は、寺域内の排水も考慮して計画的に土塁の築造が行われたことを示唆する貴重な資料である。また、

今回検出した建物跡は、隣接する調査区（調査地1）で検出した甕倉とともに、寺の生活を維持するための建物が、寺域（御本寺）の隅、土塁や堀に近接して置かれていたという寺域の利用状況の一部を示す。このことは、土塁や堀のそばに建物を建てることで、防御施設に加えて警備の意味を持っていたのかもしれない。また、鍛冶場跡を検出したことから、寺で必要な物資を寺域内で生産し、まかっていたことがわかった。

山科本願寺関係略年表

- 応永22年（1415）七世存如の嫡子として蓮如生まれる。
- 長祿元年（1457）蓮如、本願寺八世宗主となる。
- 文明3年（1471）蓮如、越前吉崎に坊舎を構える。
- 文明7年（1475）蓮如、越前吉崎御坊を去る。
- 文明9年（1477）応仁、文明の乱終わる。
- 文明10年（1478）山科本願寺の建設始まる。
- 文明12年（1480）御影堂が落成する。
- 長享2年（1488）加賀一向一揆おこる。
- 明応6年（1497）大坂石山坊舎建設。
- 明応8年（1499）3月25日蓮如没す、85才。
- 大永5年（1525）九世宗主実如没す。証如、十世宗主となる。
- 天文元年（1532）8月24日、法華宗・延暦寺・六角氏の攻撃により焼亡。山科本願寺陥落。
- 天文2年（1533）証如、石山坊舎を本寺と定める。本願寺大坂へ移転。
- 天文5年（1536）7月、天文法華の乱。
- 元亀元年（1570）織田信長との石山合戦開始。
- 天正8年（1580）本願寺顕如、信長と和睦。石山本願寺退去。その後、紀伊鷲森・泉貝塚・大坂天満と移転を繰り返す。
- 天正14年（1586）豊臣秀吉の朱印状をもって山科に寺領を回復する。
- 天正19年（1591）本願寺、京都七条堀川（現西本願寺）へ移転。
- 慶長7年（1602）東本願寺別立。このときから東西本願寺となる。
- 享保年間（1716～1736）東西本願寺がそれぞれ山科別院を建立。

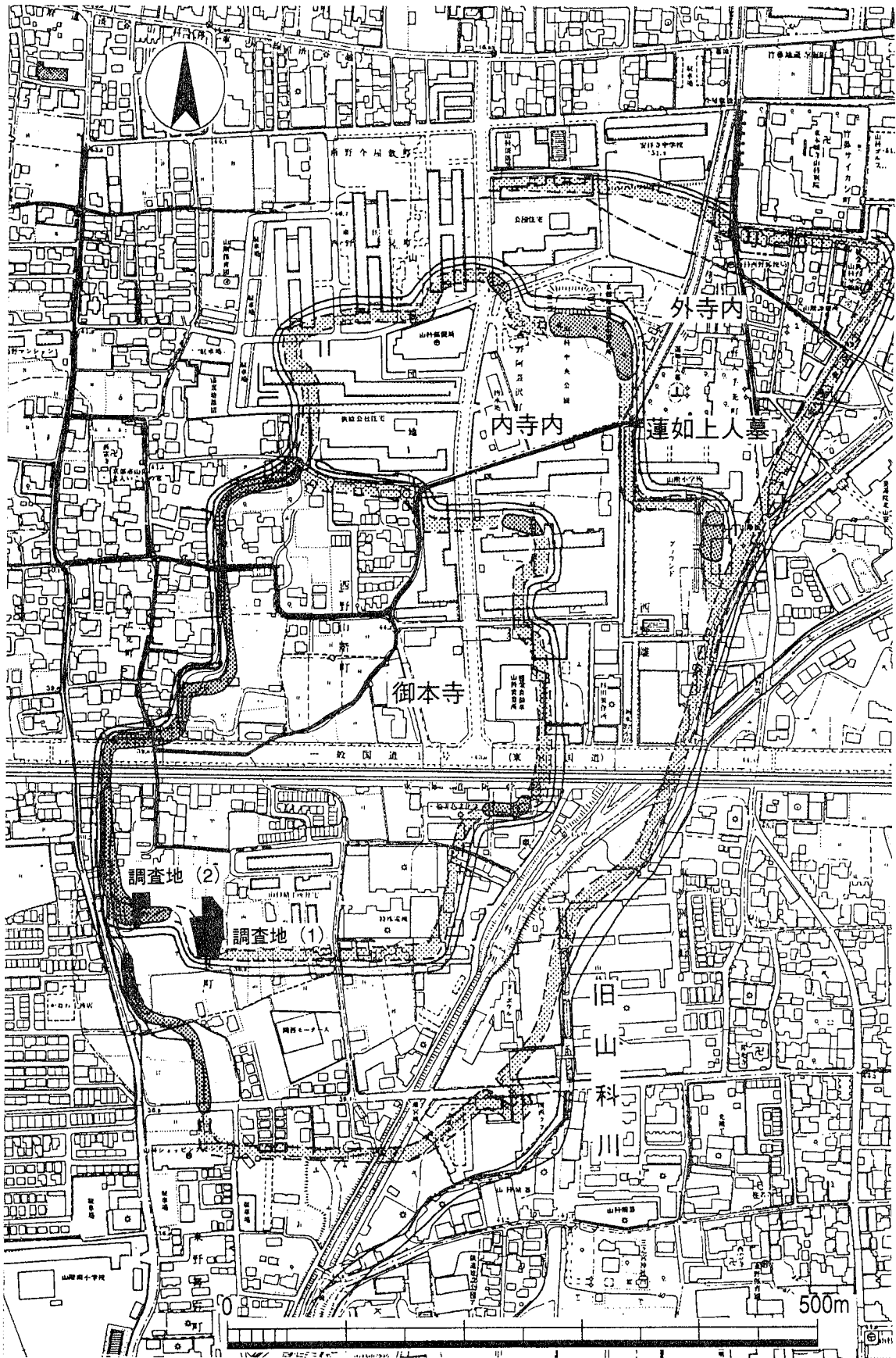


図2 調査位置図

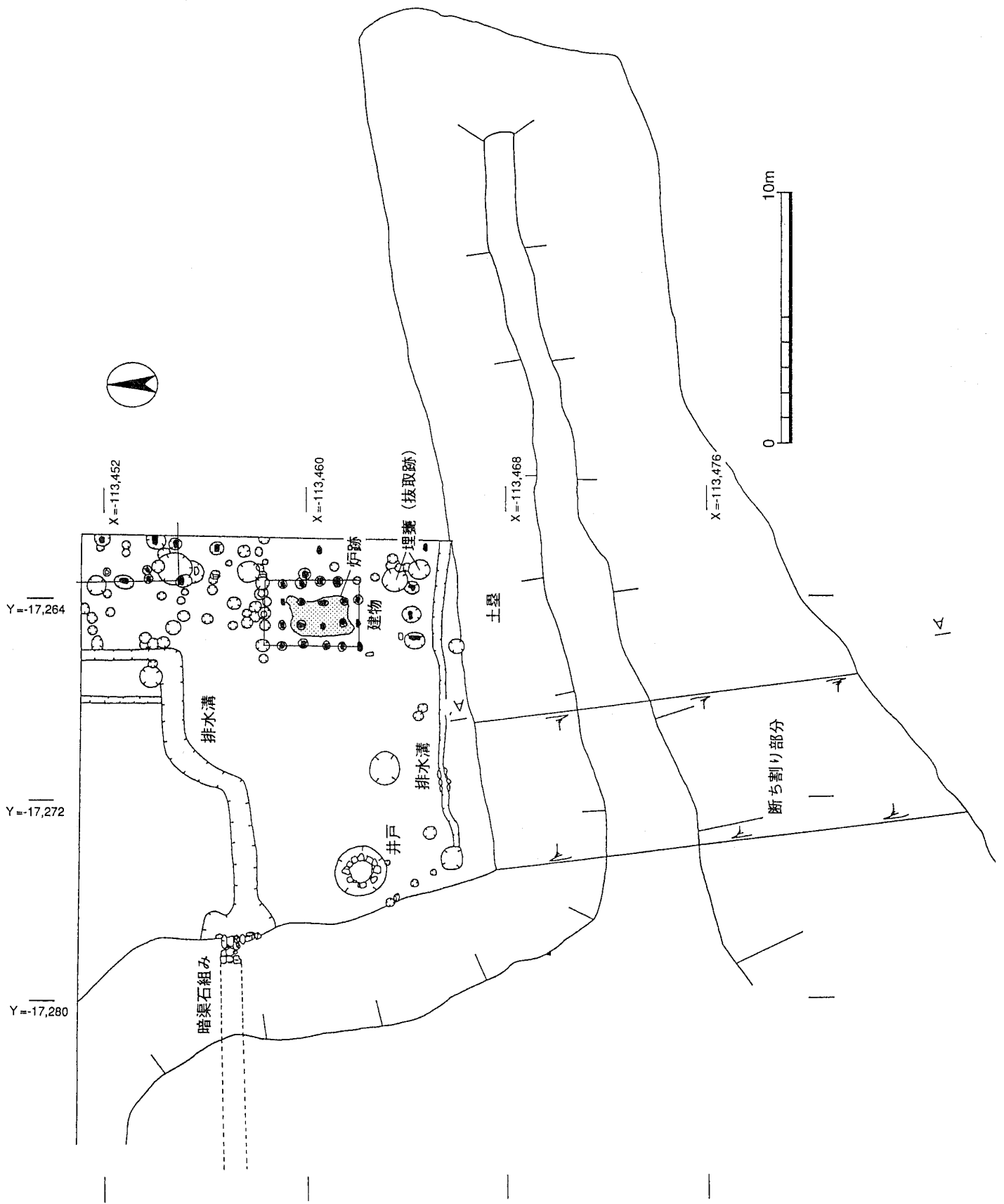


図3 調査区平面図

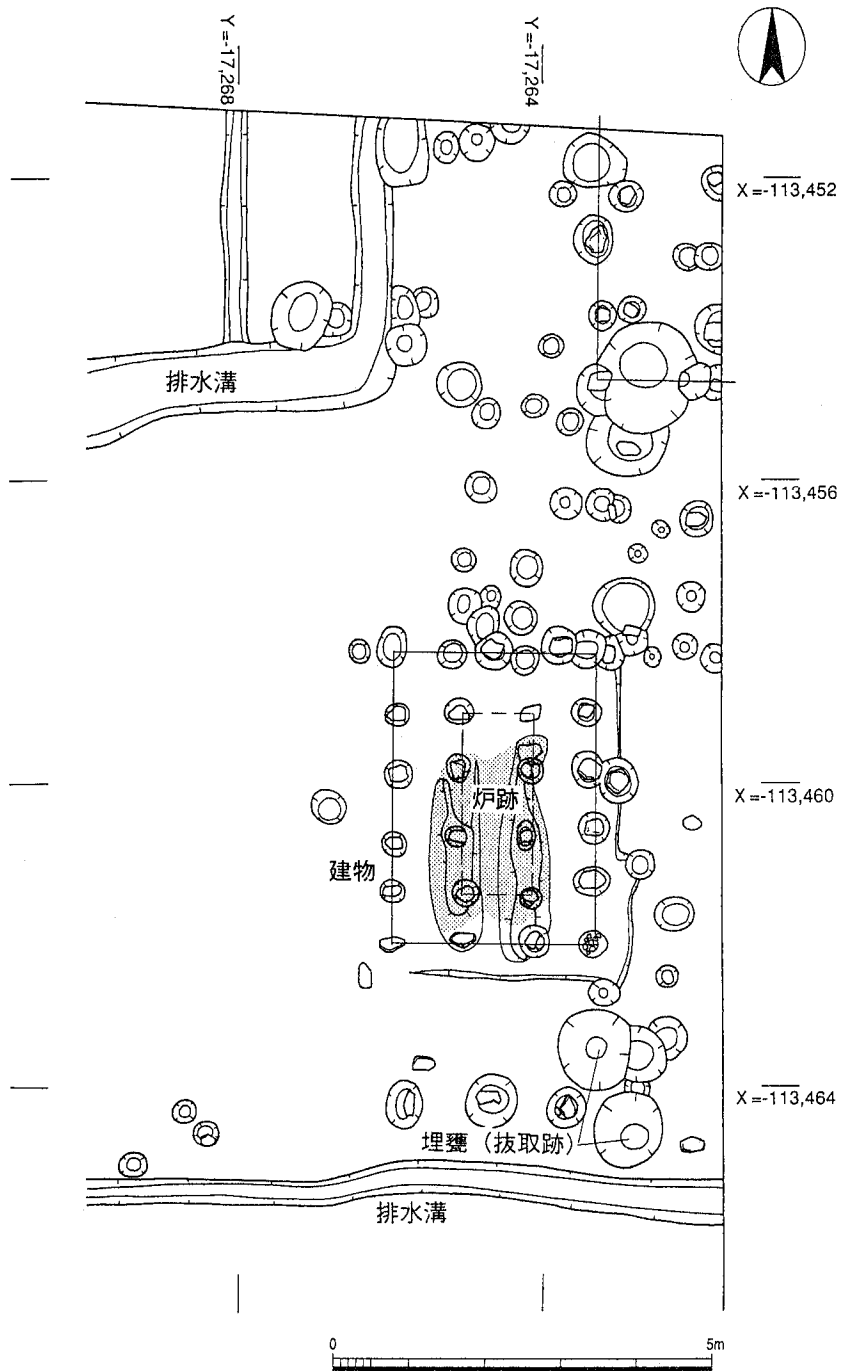


图4 東半部平面図



写真1 調査地遠景（南から）



写真2 全景（北東から）

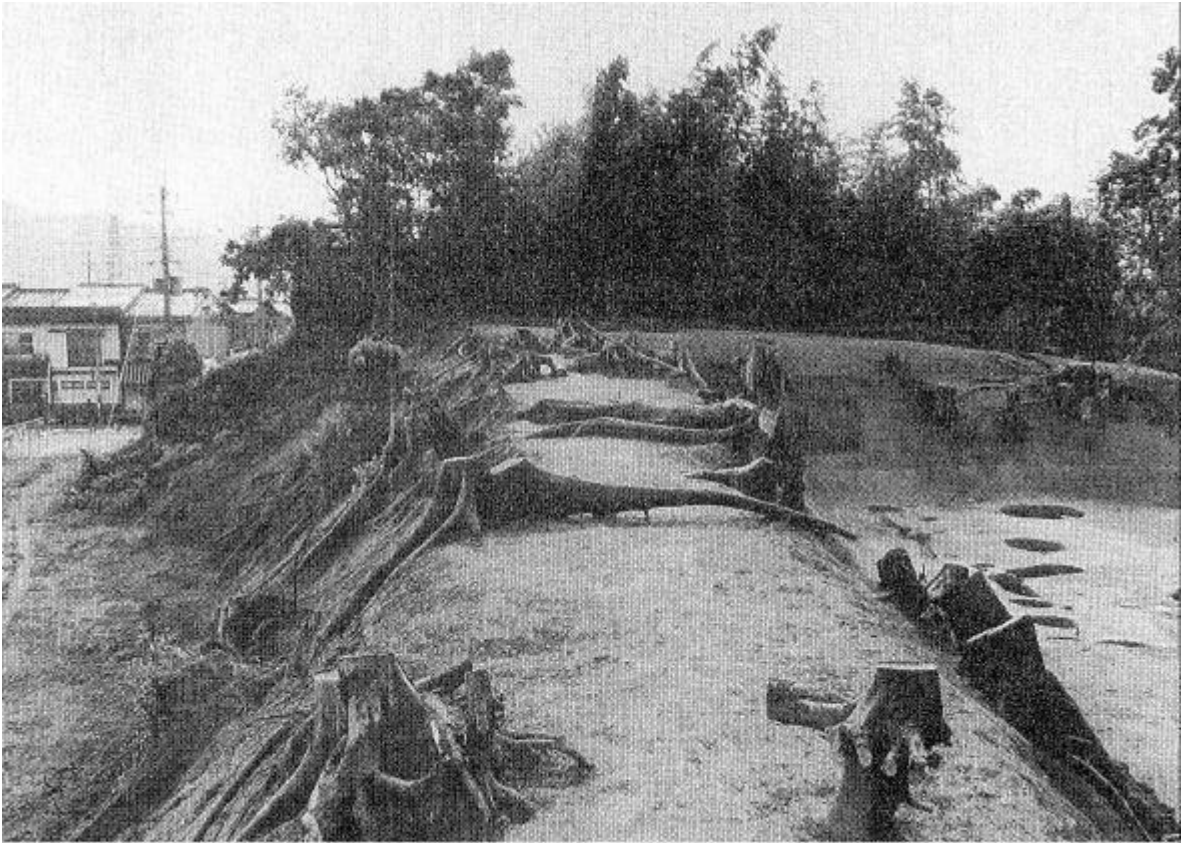


写真3 土塁上面（東から）



写真4 土塁（南東から）

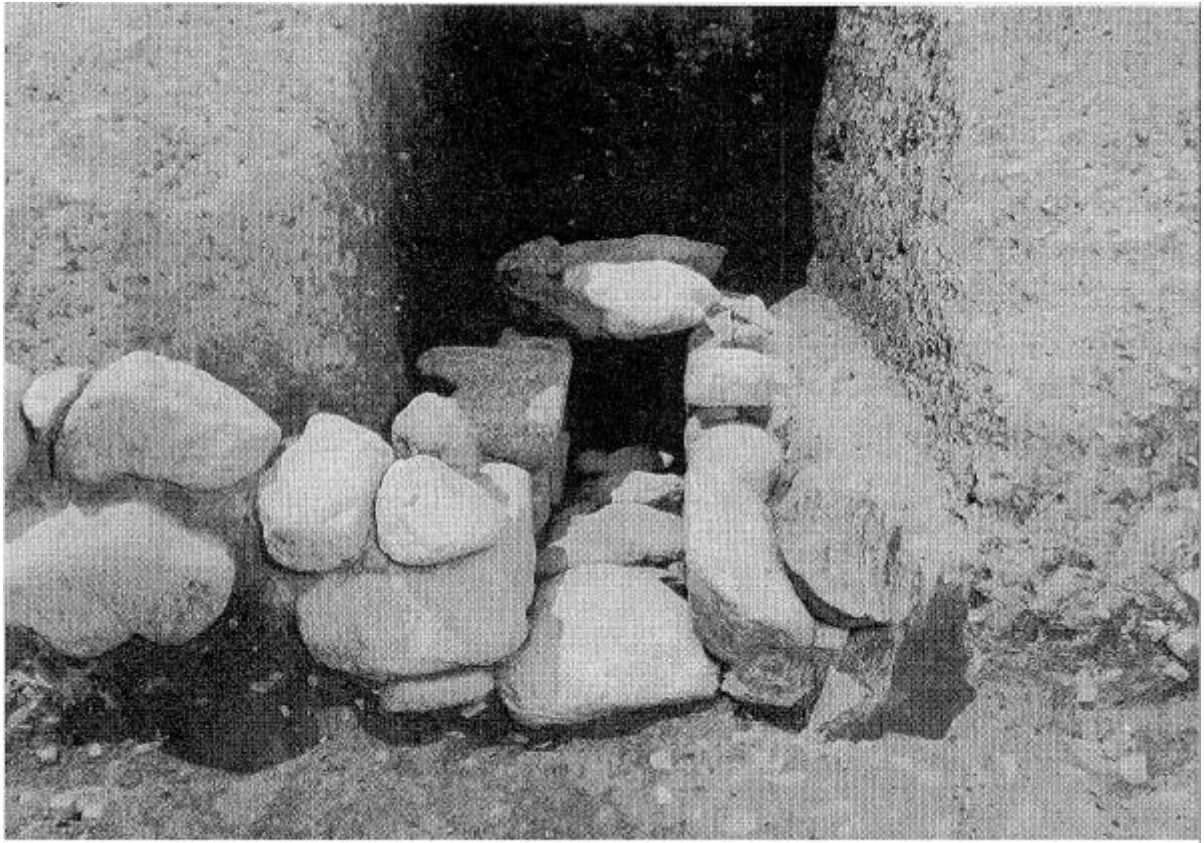


写真5 土塁暗渠（東から）

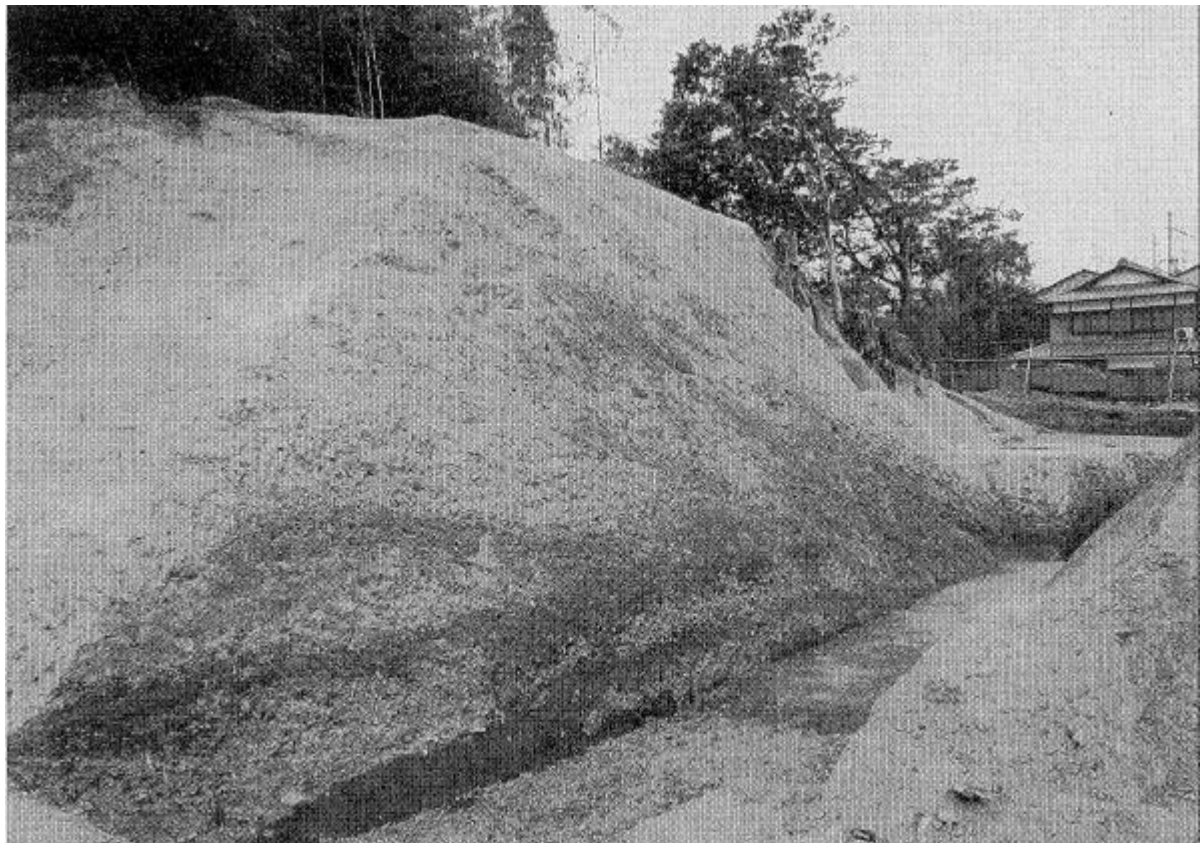


写真6 土塁断ち割り断面（南東から）